

尚綱大学図書館所蔵の家庭雑誌「団欒」の 義理人情号（大正七年三月号）における 平塚雷鳥と与謝野晶子の義理人情観

宮崎 尚子

はじめに

尚綱大学図書館が所蔵している石丸梧平主宰の家庭雑誌「団欒」（十六冊所蔵）の第四年三月号（大正七年三月一日発行）は、「義理人情号」という特集を組んでいる。執筆者は谷本富、石丸梧平、吉野至、平塚雷鳥、与謝野晶子、棚橋絢子、鳩山春子、伊賀駒吉郎、高安六郎、田口正助（掲載順）の九名である。

今回はその中の平塚雷鳥（明子）、与謝野晶子、棚橋絢子、鳩山春子の四者の「諸名家の義理人情」の頁を特に取り上げて論じる。大正七年の三月と云えば、所謂「母性保護論争」が始まった時期とも一致する。「母性保護論争」とは与謝野晶子、平塚雷鳥、山川菊栄、山田わかなどが加わり、約一年に渡り論じられ

社会現象にまでなった問題である。この論争に関わった平塚雷鳥と与謝野晶子が同時期、新義理人情観に関して「団欒」誌上で論じている。この雑誌「団欒」自体が今まで未発見のものであったので、管見の限りこの平塚雷鳥と与謝野晶子の新義理人情観は全集等にも収められていない貴重な資料である。

一、雑誌「団欒」の性格と「義理人情」特集号

雑誌「団欒」は大正四年に創刊された家庭雑誌で、主宰は石丸梧平（号…梅外）である。石丸梧平（明治十九年四月五日、大阪府豊能郡熊野田村に生まれる。没年は昭和四十四年四月八日。）は作家でもあり宗教家でもある人物で、中学校が同じだったという

縁（石丸は明治三十二年に入学し、翌三十三年十一月二十四日に「眼病」を理由に退学している。）で、作家の川端康成とも関わった人物である。後に石丸梧平主宰の「人生創造」（大正十三年創刊 大阪屋號書店）の直前までこの「団欒」は発行される。創刊号は五千部でその上再版されて大阪を中心に読まれていた雑誌と思われる。中流家庭を意識してか、料理の話や家庭の運営方法についても言及されている。そこに評論文や小説、短歌などが載せられているといった構成である。短歌といっても当時の著名人の作品を載せており、齊藤茂吉、若山牧水、折口信夫、与謝野晶子、佐々木信綱などの名が散見される。石丸は家庭生活を軸として立派な思想生活を営むことで、社会に貢献する意欲があったことが分かる。この雑誌の支援団体というべき「日本淑女会」は「団欒社」内に設けられていたようで、会長が大久保大阪府知事夫人、副会長が谷本富博士夫人で、「人類の調査抱擁と一家の団欒」を目的としていたようだ。月刊誌で、大阪を拠点とした「唯一無二の家庭と文芸」の雑誌であった。「大阪の名流婦人の筆頭には高安病

院院長医学博士高安道成婦人やす子があげられ、『家庭と文芸』の両趣味を巧みに調和し、美的生活を遺憾なく実行した存在として位置づけられている。齊藤茂吉の門下の歌人としても著名な高安やす子。いうまでもないことだが、大阪出身、京大独文科卒業、京大教授、土屋文明に師事し、近藤芳美とも作風の近い高安国世の母である。（「紅野敏郎『団欒』の創刊号—大阪からの声」「国文学解釈と鑑賞」一八八六年九月 至文堂）と言われるような良家の子女の模範となるべき、まさに家庭団欒を理想とした家庭雑誌であったことが分かる。

以下、その「義理人情」号を五人分列挙する。（「団欒」第四年三月号「義理人情号」目次は拙稿「石丸梧平主宰の家庭雑誌『団欒』に関する調査①」に所収されている。）

①義理と人情と法律と 顧問 文学博士 谷本富

昔の世の中は此の妓炉と人情との二つで治まって居たのだが、追々掟とか禁制とか云ふものが明文に書かれる様に成り、それが更に進んで今日は法治国で、社会大小の事は法律で取り極められる様に成っ

た。憲法は国家てふ一大社会の下に、五儕臣民個人として守るべき義理を定められてあり、民法は又親子とか夫婦とか、一家の關係より世間一般の取引き關係や、色々の約束に就いて人々の履んで行かねばならない義理が書いてある。

②「団欒」義理人情と新道德 主筆 石丸梅外

「義理と人情」随分よく聞く言葉で、これまでの旧道德ではこの二つの言葉が、世の中の道德の殆ど凡てを説明するのだと言つて好い位である。／道德上の徳目を挙ぐればいろ／＼に沢山あるだらうが、これを心理的に考へて見ると全くこの「義理」と「人情」の二元のなやみの中に多くの人々は過ぎて来たのである。／義理は即ち客觀的なもので、人情は主觀的のものである。／芝居などを見ても直ぐ出て来るものはこの義理と人情とのなやみである。自己の願望のまゝを通さうとする人情の切なる要求と、さうした個人の望みのまゝにはさせない世間の義理とが、堰を押しつして戦ふところに血の出る様な叫びがある。そこに芝居の見物人をして涙を絞らしめて居る。——中略——「義理」と云ふものは正しいものだ。「人

情」に就くのはいけないことだ。斯う云ふ風に昔から堅く考へられて来た。／けれどもこの考へかたは近代になるほどあまり權威がなくなつて来た。即ち人々が自己と云ふものをつかりと意識し主張して来たからである。／近代の特色はこの「自己」と云ふものをつかりと見出すところにある。昔の道德は何でも彼でも伝来の習慣によつて不合理な權威に盲従して来たものだが、近代の人々は、さうした盲従は夢にも出来ない。先づ第一に「自分」と云ふものをつかりと顧みてその上に得心づくでなければ、何事も出来ない。人本主義だとか、個人主義だとか云ふ言葉が多く用ゐられる様になつたが、どうしても主觀と云ふものを重んじる様になつて来たのである。／それで「義理」と「人情」の何れを重んずるか云ふと、云ふまでもなく人情を重んずる。自分の感情を重んじ、自分の利益を重んずる。「義理」即ち世の中への務めはなるべくしなくなつて来た。少々他人への義理は悪くても、先づ第一に自分と云ふ大切なものを立てなくてはならぬと云ふのが今日の人々の行き方である。その間にはもう二元のなやみ

などは殆ど見られない位である。

③ 近代人の生活と義理人情 夕陽丘畔 吉野至

時も処も人種もよく三世を通じて変らぬ大なる流れがある。それは人情である。この自然の流れに堤防を作ったり堰をとめたり、屈曲さしたりするものは義理である。義理の柵とはよく云つたものと思ふ。／人情は緯で真直に単調に、生まれたまゝに伸びて行かうとして居る。それに横から組合つてめめたり、交をつけたり、縮ましたりするのは義理の経である。／この二つが織り合つて人生が複雑になり、そこに無限の喜劇悲劇が構成される。／近松やシエークスピア劇などから楽天地のお芝居に至るまで、この二つの配合によりて、千趣万様の場面が構成される。／随つてこの問題は一見陳腐極まるやうに見えて、実は不老青春の活題である。千古の宿題たるデリケートなものである。／理知の窓より人生を見れば皆喜劇に見え、情よりして見ると悉く悲劇だといふ、暫く人間の立場を離れて、冷静に、上空に飛翔して俯瞰すると人間の喜怒哀楽悉くこれ小児の戯れかとも見えるが、扱て一々自ら味はひ遭遇するとどれも

かゝ生命の一部であつて血が出るほど切実なものかである。

④ 大阪の人情と風俗 甲陽中学校・樟陰女学校長

伊賀駒吉郎

斯う言つたからとて、大阪人を以て唯盲目的なる拜金の徒と看做すは甚だしき誤りだと申さねばならぬ。彼の「寿の門松」の山崎浄閑も決して涙なきとは言はれませぬ。彼等は義理人情に悖りてまでも、巨万の富を翹望するのだと言はれない。彼等が金を積もうとするのは、積むが為めのみに積むのではない彼等は金に対する興味を溝渠として、商業に対する興味も生じ、そしてその商業に対する興味が發展して、商人養成に対する興味も起つて来るのである。⑤ 諺より見たる世態人情 天王寺師範学校訓導 田口正助

好きこそものゝ上手なれ／下手の横好き／早いものが勝つ／せいては事を仕損ずる／鳶が鷹を生む／瓜の蔓には茄がならん／親に似ない子は鬼の子／体は生めども心は生まず／論語読みの論語知らず／坊主の不信心／布施ない経に袈裟おとす／商人の空誓

文／紺屋のあさつて／百姓の去年物語／子なきものは去る／腹は借りもの／粉糠三合もらつたら養子に行くな／嫁を娶れば吾子でも憎い／嫁と姑とは犬と猿／小姑一人は鬼千匹／親の光は七光り／親と月夜はいつでもよい／憎い嫁から可愛い子が出来た／女子と小人とは養ひ難し／女さかしうして牛を売り損ふ／女に白い歯を見せな／貞女両夫にまみえず／さはらぬ神に崇りなし／金がもの言ふ世の中／昔は昔今は今／はな（花）の下よりはな（鼻）の下／金の切れ目が縁の切れ目／地獄の里も金次第／金が浮世か浮世が金か／時は金なり

これらの義理人情観は、企画として「義理人情観」をテーマに書くように依頼されたと思われる内容である。①の谷本は、大きく「社会」という枠組みの中から人間関係を見ようとしている。②の石丸は古典文芸に旧弊な義理に翻弄された人々の姿を見ており、近代人は「人情」を優先させる為にそのような悩みはなくなるだろうとしている。③の吉野は「理知の窓より人生を見れば皆喜劇に見え、情よりして見ると悉く悲劇だ」といい、義理人情と文学の関係

を強調している。④の伊賀は大阪人の「義理人情」に限定して言及している。⑤の田口は人情に関わる諺を取り上げて言及している。このように「団欒」は家庭雑誌とは言っても全体的に文芸雑誌の趣が強い。

二、「新しい女」と「母性保護論争」の影響

平塚雷鳥と与謝野晶子の新義理人情観が掲載されているのが次にあげる「諸名家の義理人情」という項目である。

諸名家の義理人情

新しい人には義理は不必要である 平塚 朋子^(ママ)
昔の人は、義理人情を解する人を最も善人としてゐたやうですけれど、義理と人情は反対のやうに思ひます。

義理はほんの形式な、即ち非人情的なもので、真の情から出たものではないと思ひます。だから新しい人にはこの義理と言ふものは不必要の事のやうに思はれます。／人情には昔も今も変わりはないのでせうが、人情の表現法にはそれぞれ相異があると思ひ

ます。

新しい義理に生きよ 与謝野晶子

新しい義理、新しい人情に生きることを忘れて、古き義理人情にのみ拘泥することを私は好みません。進化のない所にほんとうの生活はないと思ひます。義理も人情も進化します。その進化に率先するのが進歩主義者、それに追隨するのが保守主義者、さうして全くその進化を無視するのが、時代錯誤の頑迷者流だと考へます。

公的の義理人情たれ 棚橋絢子

現代の状態は眞の義理人情といふものは行はず、益々輕佻浮薄に傾く感なき能はず。之れを路上に觀るに電車または汽車等の中に入るもの他人の迷惑となることを為すが如き往々これあり、単に知れる人、交る人の間に普通の義理人情といふものを尽くさず、一般公共の上につきて今少し相互に之れを尽したきものと常に感じ居れり。

同情より自然に發露するものが人情也 鳩山

春子

人情に最も必要なるは感謝の心と同情の心である

と存じます。忠といひ孝といふもの畢竟自己が受ける親切、同情、恩恵に感謝し、忘れざるに基づく。また家庭、社会の円満和合は、吾人が人の困苦を察するの明を備へその困苦の原因如何を問はず、之を氣の毒に思ひ慰撫援助の手を伸ばさんとする美しき同情が根底となつて、自然に發露するに在ると存じます。

森鷗外によつて「与謝野晶子さんに就いて」(「中央公論」明治四十五年六月号)の中で「僕が特に言はなくてはならない事は無いだらう。併し樋口さんが亡くなつてから、女流のすぐれた人を推すとすると、どうしても此人であらう。」とまで評された平塚雷鳥と与謝野晶子である。九人の論者たちの中で石丸梧平の「新道德」という表現以外、二人だけが義理人情觀に明確に「新しい」という言葉を用いている。雷鳥は新しい人に義理は不要で、人情だけで生きて行くべきだと主張している。対して晶子は新しい義理人情を模索するべきだと述べる。義理人情号の他の執筆者たちにはない「新しい」義理人情觀を持っている点が特異である。この時期、それだけ二人が「新

しい」という言葉を意識していたということの証でもある。大正二年一月号の「中央公論」にて、雷鳥は「私は新しい女である」という文章を掲載している。

雷鳥は『青鞥』の編集権を伊藤野枝に譲渡してからは家族の世話に追われ、生活は困窮していた。大正七年三月に与謝野晶子が「婦人公論」誌上に於いて「紫陰録」の中の一項目「女子の徹底した独立」という文章に「欧米の婦人運動によつて唱へられる、妊娠分娩等の時期にある婦人が国家に向つて経済上の特殊な保護を要求しやうといふ主張に賛成しかねます」とし「男子の財力をあてにして結婚及び分娩する女子は、たとへそれが恋愛関係の成立してゐる男女の中であつても、経済的には依頼主義をとつて男子の奴隷となり、もしくは男子の労働の成果を侵害し盗用しつつかある者だと思ひます」と女子の経済的自立の必要性を主張した。これに対して雷鳥は「婦人公論」五月号において「母性保護の主張は依頼主義か―与謝野晶子氏へ―」として反論している。「十分な言葉の意味で母の経済的独立といふことは余程特殊な労働能力ある者のほかは全然不可能なことだ

としか私には考えられません」として、母性保護は国家の義務だと雷鳥は主張する。この様子は「母性保護を国家にもとめるのは奴隷道徳の考えだとする主張と、母性保護は国家の当然の義務だとする主張とは、終始まじわることのない平行線をえがいた。」（岡満男「婦人雑誌ジャーナリズムの軌跡（三）―男尊女卑の生活秩序をめぐる―」「評論・社会科学」一九八〇年八月）と評されている。この後一年に及び、母性保護論争は山川菊栄や山田わか、島中雄三、山田嘉吉（山田わかの子）等を交えた大論争へと発展して社会現象化した。女性解放の思想家であった山川菊栄は、双方の主張を部分的に認めつつも、大事なのは差別のない社会でしか夫人の解放は実現しないと社会主義的な立場から母性保護論を展開した。

結論

家庭雑誌「団欒」誌上における九人の義理人情観を見て来た。平塚雷鳥は新しい人には義理そのものが不要無く、人情だけに生きれば良いと云う。方や晶子は旧弊の義理人情ではなく、義理人情そのもの

が新しい認識で捉えられ直すべきだと主張する。「義理人情」というテーマを「新しい」視点で捉え直すべきと主張したのはこの二人だけである。そういう点で二人の主張は表面上違いながらも、根本的なところでは共通の認識をしていたと指摘できる。

〈参考文献〉

今井小の実 『婦人新報』と母性保護論争―矯風会の婦人界における位置付けを検討する指標として―（『キリスト教社会問題研究（五十一）』

二〇〇二年十二月）